



今月のことば 令和5年(2023) 10月 <No.206>

宗教の詩



大阪に榎本栄一さんという妙好人がおられました。明治時代に生まれ、商店を営みながら、お念仏いただいた日暮らしをつづり続けた方です。60歳を過ぎて始めた詩は、素朴でありながら力強く、人生を深く味わうものばかりです。

真光寺の前住職が榎本さんの詩を好きだったようで、お寺には詩集が数冊遺されています。かつて前住が挟んだ付箋をたどり、そのいくつかをご紹介します。

(『群生海』榎本栄一 著 より)

「ぞうきん」

ぞうきんは
他のよごれを
いっしょけんめい拭いて
自分は よごれにまみれている

「木の上」

うぬぼれは
木の上から ポタンと落ちた
落ちたうぬぼれは
いつのまにか
また 木の上に登っている

「後光」

私の一生は
傷だらけであるが
この傷から
しみじみと手が合えられるような
後光がさしてくる

遺してくれた付箋やメモが、十年前に往生をとげた前住の、人生の味わいの一部を偲ばせてくれます。長兄が戦死し、自分の進路をあきらめてお寺を継いだこと。10歳の息子を亡くしたこと。教師との兼職で、土日の休みなく働き続けたこと。つれあい（前坊守）に先立たれてから、十年長生きしたこと……。それぞれの詩は、榎本さんとはまったく違った人生を歩んだ前住にも、訴えかけるものがあったのだと思います。

『群生海』の巻末に、医者であり念仏者でもあった米沢英雄さんが文章を寄せています。

神を讃嘆し、仏を讃嘆するから宗教詩なのではない。念仏が表白されているから宗教詩なのでもない。仏法が身体全体にとけこんで、自分なりの生活の中から洩れてくるつぶやき、そのつぶやきの背後を流れているものを読むものにそれとなく感じせしめるもの、それが宗教詩だと私は言いたい。

長い人生の歩み、困難を抱えていない人などいないでしょう。そして誰もが自分の人生に即した「宗教の詩」を心の中で書きながら、けんめいに生きているのではないかと思います。



慧日山 真光寺